

## 牧師、バイカー、鮫職人として。。。シェア from LA 第4話「ディズニー・ホール前にて。ジョセフ」

私は建築物を見るのが好きだ。高層ビルや巨大な橋、古い家屋などなど。ここ LA には、映画やミュージックビデオに出てくる名所が満載で、ロサンゼルス川にかかる一丁目の橋や、そこからのダウンタウンの眺め、ジェームズ・ディーンで有名なグリフィス・パークや、映画“ブレードランナー”で知られるブラッドベリー・ビルなど見てるだけで楽しくなる。辛い時、悲しい時、ガックリ来た時、よくそれらの周辺をバイクで流したり、ブラブラ歩いたりする。

6年ほど前のクリスマスシーズンも、教会の状況は本当に厳しかった。開拓中とは言え誰も来ない日が多くあり、その日もかなり気が落ち込んでいた。ふとディズニー・ホールを見たくなりダウンタウンまで出かけた。同館がオープンした2003年以前、この辺りはスラム同然で、ゴミゴミして暗く汚かったが全く生まれ変わった。トコトコ歩いて行くと、おー出てきた、銀びかりする巨大ホールが。「ええなあ。」さすが世界百大建築物に入るだけのことはある などと見上げてると、ちょうどそこに信号待ちをしている地味な感じの丸顔のおっちゃん(たぶん私ぐらいの歳)がいたので、「すみません。写真撮ってもらえませんか？」と尋ねた。「いいですよ。」と心よく応じてくれた。「いやあ、この辺りもずいぶん変わったね～」と話しかけると、「そうだね。以前この辺りに住んでたんだけど、全く変わっちゃった。」 彼の名はジョセフ。すでに信号は青になったがオッサン2人で立ち話が始まった。

ボク：「え？ 以前住んでたってことは、今日はたまたま？」

ジョセフ：「うん。さっきそこの教会の礼拝へ行ってたんだ。引越す以前に行ってた教会。懐かしくてね。ちょっとブラブラしてたんだよ。」

ボク：「え？ 礼拝？ 私は実はパスター(牧師)です。午後まで礼拝してました。」

ジョセフ：「え？ アンタもクリスチャン？ いいね～」と彼は笑ったが、と突然、「でもあいつらはダメだ！ あいつらはバカなんだ！」 などと言い出した。

ボク：「あいつらって??」

ジョセフ：「無神論主義者たちだよ！ 何かあればいつもクリスチャンをバカにしやがって！ あいつらみんな地獄行きなんだよ！」

ボク：「いや そりゃ違うだろ？」 と思わず彼の言葉を遮った私。

ジョセフ：「え??」 と怪訝な顔で私を見つめる彼。

ボク：「そうじゃない。俺たちも皆バカだったんだ。彼らと何も変わらないよ。」

俺たちも滅ぶところだったんだよ。でもイエスさまが救ってくれた。

だから俺たちは福音を辛抱強く語り続けたいといけなんだよ。俺はそのために働いてる。」

彼は少し考えていたが、やがて向き直り、

ジョセフ：「アンタの言う通りだよ。俺が間違ってた。俺たち皆バカだったけど、  
イエスさまが救ってくれた！」

ボク：「そうとも！AMEN！」

ジョセフ：「アンタに会えて良かったよ。じゃあな。God bless you(神の祝福があるように)」

ボク：「俺もさ。良かったよ。気い付けてな。God bless you too(あなたにも神の祝福があるように)」  
がちり握手をして別れた。ここへ来るまでのモヤモヤと打って変わった清々しい気持ちを主に感謝しつつ、

**「彼らが聞いても、聞かなくても、あなたはわたしの言葉を彼らに語れ。」 エゼキエル2章7節**

の言葉を思いつつ家路についた。“もの言う牧師”である私の真骨頂かも知れないが、ポイントは2つある。私がコテンパンに自分の無力に打ちのめされ、主の前に砕かれていたこと。そして、ジョセフとの「御霊の一致」である。もし彼があの時、イエスに焦点を合わすことが出来なければ、際限のない議論になっていたかも知れない。宗派や教義、それぞれの思い。しかしそれは、しょせん宗教心を通して自分の欲望を満たす行為でしかなく、一致どころか無益な闘争をもたらす。イエスを信じるのが唯一の道なのだ。

5-1-2019

